

2009年8月11日

フィールドスクール総括会

総括セッションは、14時から、ティルタヤサ大学の講義室の一室で行われた。まずは竹口が、5日間のタマンジャヤ村でのホームステイを通じて学んだことを、ステイ先の家族の事を中心に、村のコミュニティの繋がりの強さについて発表した。次に、下山が、タマンジャヤ村の経済状況に関して、聞き取り調査から住民主体のコミュニティの存在の重要性やそれを包括する問題を分析した。平田は、村での生活で見つけた小さな疑問から、村の観光化への戸惑いまで、自分なりの意見をインドネシア語を交えて発表した。古川は、村の経済発展と国立公園の保全に関して、地域住民からのボトムアップ方式の働きかけと地方行政側からのトップダウン方式での働きかけの重要性と、その目的意識の一致の必要性について述べた。原田は、タマンジャヤ村の家屋の壁に使われている竹の模様の違いや利用方法に興味を持ち、そこから生態資源のとしての竹、そして民族との関係について発表した。最後に佐々木がインドネシア語で、マランでのホームステイ経験からマランとタマンジャヤ村の生活環境の違い、そして住民主体のコミュニティによる経済発展の可能性に関して発表した。

各参加学生発表後の意見交換では、研究対象の異なる学生同士が議論することで、一つの事象を多面的な方向から見ることができ、今後個々の研究においても広い視野を持つことの重要性に気がついたとの意見が学生側から口々に飛び交った。

引き続き、京都大学引率教員とティルタヤサ大学カウンターパート教員から話を頂いた。感性を大切にすること、初心を忘れないこと、そして何より、フィールドワーカーとしていろんな地域で調査を行うとき、その裏で多くの人々の支援協力があることを忘れてはいけないとのアドバイスを頂いた。実際、この10日間のフィールドスクールは、一年以上前から京都大学とティルタヤサ大学との綿密な話し合いや事前の準備調査を基に実施されている。フィールドスクールの企画から期間中の参加者の体調管理まで様々に気を配ってくださった先生方及び関係者スタッフの皆様、本当にありがとうございました。
(敬称略)



Closing reception

(記録：古川文美子)